

『日本語の起源』の旧版と新版

川 岸 克 己

The Old and New Editions of *Nippongo no Kigen* (The Origin of Japanese)

Katsumi KAWAGISHI

1. はじめに

大野晋の著作に『日本語の起源』と題するものが2冊ある。1957年に1冊目の『日本語の起源』が出版され、1994年に『日本語の起源 新版』が出版された。1994年に出版された方は、その題名に「新版」の語が付されたので、1957年の方は一般的に「旧版」とされている。ただし、旧版はすでに絶版になっている。

両者には37年の隔りがある。同名の著作であるにもかかわらず前者にはなにも断りがなく、後者にのみ「新版」という語があることから、当初から2冊を出版するつもりであったとは思えない。37年の隔りがあり、続き物としての出版計画がないにもかかわらず、なぜ同じ題名の著作が出版されたのだろうか。

川村二郎は『孤高 国語学者 大野晋の生涯』（東京書籍、2009年）の中で、『日本語の起源』の旧版を絶版にしたいという趣旨の本人の言葉を紹介している。大野晋が1980年に南インドでフィールドワークを実施していたころである。絶版にしたいという理由を同書は、最終報告を書くため、だったとしている。しかし、もし継続する研究であれば、前書を絶版にする必要はない。なぜ旧版を絶版にしなければならなかったのだろうか。

推測される理由は、2つある。1つは、『孤高』のなかで述べられているように、出版ののちに新たに進展した研究内容を効果的に明示するためであったというものであり、もう1つは、旧版の研究結果に誤りがあり、それを破棄し新説を提示するためであったというものである。つまり、継続を意図したのか、あるいは刷新を意図したのかのいずれかであったと推測される。

本論は、『日本語の起源』がなぜ同じ題名で出版されたのかを手がかりに、「起源」という概念の捉え方について考察し、大野晋の到達した日本語の「起源」について考察する。

2. 旧版と新版の比較

旧版と新版の目次を比べてみると、研究対象が異なる。旧版は、アイヌ・南方・アルタイ・朝鮮と日本の南北および西に目を向け、全方位的な検討を試みており、それに対して新版は、ほぼタミル語のみについての調査分析を行っている。旧版で対象にしたものと新版で対象としたものが別であることから、その点においては両者は独立した関係にあるということが出来る。

『日本語の起源』旧版と新版の比較

旧版 (1957年)	新版 (1994年)
はじめに	はじめに
I 日本人とアイヌと 1 日本人のはじめ 2 アイヌは本州に住んでいたか 3 アイヌは日本人と同じ人種か 4 日本人の地方差とアイヌ 5 アイヌ文化と日本文化 6 アイヌ語は日本語と同系か	第一章 同系語の存在 一 探索のはじまり 二 探索の方法 三 南インドのタミル語を選択する 四 単語の対応——語根の比較 五 文法の比較 六 五七五七七の韻律
II 日本の東部と西部と 1 東と西の言葉の違い 2 昔も東と西で言葉が違っていた 3 大昔は東と西に違った文化があった 4 西部日本と南方文化	第二章 対応語と物の世界 一 稲作のはじまり 二 墓と墓地 三 グラフィティと記号文 四 金属の使用 五 機織のはじまり
III 南方に日本語の親戚があるか 1 どんな言語を親戚というか 2 琉球語は日本語の兄弟である 3 高砂族の言語とマライ-ポリネシア語 4 モン-クメール語の代名詞と人体語 5 チベット-ビルマ語は親戚といえるか 6 レプチャ語は万葉語と同じ言葉か	第三章 対応語と精神の世界 一 生活の慣習 二 精神の世界の支点 三 精神生活の根幹
IV 古代日本語とアルタイ語・朝鮮語 1 弥生式文化と南朝鮮 2 アルタイ語の特徴と母音調和 3 橋本進吉博士による発見 4 古代日本語の母音調和の発見 5 古代日本語とアルタイ語 6 日本語と朝鮮語 7 南方語と北方語——日本語の成立	第四章 南インドの言語・文明と日本・朝鮮 一 日本語とタミル語の同系 二 私の説に対する質疑
V 探索は続く 1 基礎語は一定の速さで代っていく 2 どんな単語を比較したらよいか 3 意味の対応の型を見出そう	あとがき

旧版の最終章には、(日本語の起源をめぐる調査研究の)「探索は続く」とあり、そこに着目すると、その継続の結果が新版であると見ることもできる。しかし、継続であれば、研究対象の異なる両者は等価であり、続き物であることを明示できるような題目となるだろうし、前者の著作を廃版にする必要はないし、むしろ廃版にしてはならないだろう。

旧版と新版には、それぞれ「日本語の起源」について簡潔にまとめた箇所があり、そこを比べてみると、両者に違いがあることが分かる。

『日本語の起源』(旧版) p198

日本には縄文式時代に、ポリネシア語族のような音韻組織を持った南方系の言語が行われていた。弥生式文化の伝来とともに、アルタイ語的な文法体系と母音調和を持った朝鮮南部の言語が行われるようになり、それは北九州から、南へ、東へと広まり、第一次的には近畿地方までをその言語区域としたであろう。やがてそれは、弥生式文化の東方への拡大にもなってアヅマの地域にも広まって行き、九州・四国・本州に、奈良時代の言語に見られるものに似た、原始日本語が成立したであろう。おそらく琉球の諸言語が日本語的な性格を持つに至ったのも、弥生式文化の伝播と同時であると見ることができるだろう。

ただ、朝鮮からの言語の伝来は、圧倒的多数の人間の渡来を伴ってはいなかったために、それまでの言語の文法体系を変えることはできたけれども、語彙のいくつかは、変えずに残した。(下線川岸)

『日本語の起源 新版』 p244

日本には縄文時代にオーストロネシア語族の中の一つと思われる、四母音の、母音終わりの、簡単な子音組織を持つ言語が行われていた。そこに紀元前数百年の頃、南インドから稲作・金属器・機織という当時の最先端を行く強力な文明を持つ人々が到来した。その文明は北九州から西日本を巻き込み、東日本へと広まり、それにつれて言語も以前からの言語の発音や単語を土台として、基礎語、文法、五七五七七の歌の形式を受け入れた。そこに成立した言語がヤマトコトバの体系であり、その文明が弥生時代を作った(その頃、南インドはまだ文字時代に入らなかったで、文字は南インドから伝わらなかった)。寄せて来た文明の波は朝鮮半島にも、殊に南部に日本と同時に、同様に及んだが、中国が紀元前一〇八年に楽浪四郡を設置するに至って、中国の文明と政治の影響が強まり、南インドとの交渉は薄れて行った。しかし南インドがもたらした言語と文明は日本に定着した。その後紀元四、五世紀に日本は中国の漢字を学んで文字時代に入り、漢字を万葉仮名として応用し、紀元九世紀に至って仮名文字という自分の言語に適する文字体系を作り上げた。(下線川岸)

旧版においては、縄文式時代は南方の言語であり、弥生式時代は北方の言語であるという説を展開し、対して新版においては、縄文時代は南方の言語であり、弥生時代も同じく南方の言語であるという説を展開している。

旧版

- 1) 縄文式時代、ポリネシア語族のような南方系の言語。
- 2) 弥生式時代、アルタイ語的な朝鮮南部の言語。

新版

- 1) 縄文時代、オーストロネシア語族の中の一つの言語。
- 2) 弥生時代、強力な文明とともに南インドから言語が流入。

大きな相違点は、弥生時代の言語状況に対する部分である。旧版ではアルタイ語の影響を想定したが、新版では南インド(タミル語)の影響であるとしている。大野は、この後も日本語の起源は南インドのタミル語として研究を進め、弥生文明との密接な関係を主張していく。となると、弥生時代にアルタイ語の影響をうけた言語が存在したというのはその後の研究と相反する内容となり、訂正する必要が出てくる。

したがって、同じ書名の著作が出版された理由は、研究そのものは継続するものではあるが、その内容は先行の著作における考察と異なるものであるがゆえであったと理解するのが自然である。同名の著作を出版してリニューアルすることによって、以前の論を発展的に修正したと見ることができる。つまり、旧版は新版によって訂正が加えられ、刷新されたわけである。

3. 「起源」とはなにか？

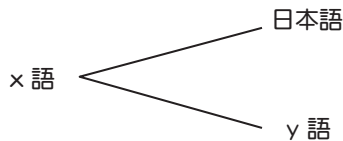
『日本語の起源』と題された2つの著作は、文字通り日本語の起源を探求するものであるが、そもそも「起源」とはなにかということであらためて考えてみる必要がある。

従来の研究では、日本語の起源は決定的とは言えないものの北方のアルタイ語や東アジアの言語が有力とされていた。そこに南インドのタミル語が日本語の起源であると打ち上げた大野の説は、容易に受け入れられるものではなかったようだ。そこにはさまざまな理由が存在するだろうが、この問題を論ずる大前提としての「起源」という概念の認識の違いに起因していたように思われてならない。

「起源」について、大野晋は『日本語の源流を求めて』（岩波書店、2007年）において、図を用いて説明している。



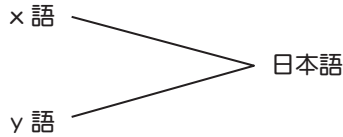
これは、第一の仮定として紹介されたもので、起源に関する素朴な考え方である。日本語はこの日本列島において発生し、外部からの影響を多少は受けながらも、日本語として変化して来たという考え方である。ただし、あくまでサンプルとして例示されたものにすぎない。



これは、第二の仮定として紹介されたもので、x 語という祖語が分岐して日本語と y 語とが発生したという考え方である。これは比較言語学の系統論的な考え方である。同じルーツである x 語から別れた、日本語と近い関係にある y 語を探索し、日本語と y 語との比較から、x 語を見つけ出す、あるいは再建していき、これらの言語が属する語族の全体像を明らかにしていく、というものである。そして、この場合の x 語や y 語の探索が日本語の起源の探求となるわけである。すなわち、語源というものは、日本語の場合、日本列島以外の場所に、日本語とは別の x 語（あるいは y 語）が存在し、それを探し求めることこそが語源研究であるという考え方である。

しかしながら、これまで日本の近隣あるいはアジア全域においても、音韻構造、語彙体系、文法構造などが決定的に日本語に類似した、日本語とは別の言語を見つけることはできなかった。これは「起源」という概念を根本的に再考しなければならないことを感じさせるものである。

大野晋のタミル語研究は、最終的に日本語を「クレオールタミル語」として定義するわけであるが、これは従来の日本語の語源研究とは立場を異にし、2つ以上の言語が融合することによって成立したという考え方である。これは、大野晋が『日本語の源流を求めて』の中で紹介した2つの仮定のいずれでもない。いわば、「第三の仮定」というべき「語源」に関する見方である。前掲書にならって図にすれば以下のようなになる。



この第三の仮定は、すなわち、日本語以外にそのままで日本語の起源といえるような言語があるのではなく、日本語とは多々異なるところがあるけれども、日本語にその一部が存在するという言語がいくつかあって、それらがいくつか融合することによって、現在の日本語ができあがったという考え方である。

大野晋には『日本語の語源』と同じ岩波新書に、先ほど取り上げた『日本語の源流を求めて』(2007年)がある。一見、日本語の起源ともいべき言語がどこか遙か上流に存在するかのようニュアンスを漂わせるタイトルである。目次を見ても同様である。

しかし、その内容は、必ずしもそうした想像と同じではない。「IV 言語は文明に随いて行く」のところにあるまとめは以下のようにさまざまな言語の影響を列挙している。

全体的に振り返れば、日本列島の言語を見ると、次のようにいえるであろう。

1. 日本では、縄文時代には西日本ではポリネシア語族の一つが使われていた。その単語はすべて母音終わりであった。
2. そこにタミル語が到達して、私の言うヤマトコトバが作られて来た。
3. ヤマトコトバは南へ、東へと、その高い文明と共に広まって行った。
4. その頃、北海道、東北地方にはアイヌ語が行き渡っていただろうが、時の経過とともにヤマトコトバに同化され、アイヌ語は江戸時代には北海道、樺太、千島へと退いた。
5. 九州南部には隼人語が行なわれていたが、それも次第にヤマトコトバ化され、一二世紀頃には沖縄にヤマトコトバが広まっていき、『おもろそうし』が一六世紀に成立した。
6. タミル語の到来によってヤマトコトバが成立した後、朝鮮半島から高句麗が入って来て、数詞の一部分と共に、他の単語やタミル語と異なる文明を日本にもたらした。
7. その後、朝鮮半島を経て漢字が伝来した。その字音を学んで、次のように言語が変遷していった。(中略)
8. 江戸時代から、ポルトガル、オランダと交渉を生じ、カステラ、スポイトなどのヨーロッパ語が

『日本語の源流を求めて』(2007年)

まえがき

I タミル語と出会うまで

- 1 日本とは何か
- 2 国語学を手段として
- 3 古典語の研究

II 言語を比較する

- 4 言語の比較ということ
- 5 タミル語との遭遇
- 6 単語の対応(1)——母音と子音と
- 7 単語の対応(2)——文例とともに
- 8 文法の共通
- 9 五七五七七の韻律

III 文明の伝来

- 10 水田稲作は南インドから
- 11 鉄も南インドから
- 12 機織も南インドから
- 13 結婚の方式
- 14 小正月の行事
- 15 神という存在
- 16 石の墓、土の墓
- 17 グラフィティ(記号文)

IV 言語は文明に随いて行く

- 18 船と海上交通
- 19 何を求めて日本に来たか
- 20 朝鮮語にもタミル語が来ている
- 21 タミル語到来以前の日本語
- 22 日本語の歩んだ道

あとがき

入って来た。

9. 明治以後、西欧の文明の摂取に努めて以来、英独仏語が日本語に加わった。

(『日本語の源流を求めて』 pp259-261)

そして、以下の言葉で締めくくっている。

私は数十年にわたる日本語追求のうちに、一つのことを見出した。言語は言語自身で少しずつ動く点もある。しかし異文明の強い激しい波が寄せて来たときは、言語はその影響を大きくこうむるものだということである。

(『日本語の源流を求めて』 p262)

すなわち、言語は、それ自体が変化することもあるが、言語の変化は、異文明の強い影響のもとによってなされるものであり、その影響によって大きく変化して行くものであるという認識である。これは、さきの第三の仮定の考え方である。

日本語における起源は、外部にそのまま残っていて、それが時間の経過のもとに変化した、その初期型の言語を見つけ出すという行為ではない。複数の言語の接触によって、あたかも化学変化のように、さまざまな要素との接触によって変化前とは大きく異なっていくプロセスに対するまなざしがこの起源研究のあり方である。

従来は、日本語よりも古い時代に日本語の祖先にあたる言語が存在したとし、その言語の痕跡を残す言語を見つけたり、祖先にあたる言語を再構築したりして得られたものが「起源」と呼ぶに相応しいものであった。

しかし、ここで大野が主張している日本語の起源は、さまざまな言語がさまざまな影響を与えたとするものである。なかでも、日本語の根幹において文法構造の根幹から影響を与えたものがタミル語であるというわけであった。

大野晋が到達した日本語の起源研究は、この第三の仮定に基づいた「融合」する言語としての日本語の様相を探求することにあつた。

従来の日本語起源の研究は、複数の起源が並立することを許容しないように見える。これは比較言語学の系統論がインドヨーロッパ語族という一筋の流れを研究することによって成立した学問であることから理解できる。一方、日本語の成立には、さまざまな言語が文法構造そのものに影響を与えたり、あるいは借用関係によって少なからず日本語の成立に影響を与えている。日本語は、いわば「融合性」によって形作られているといえる。インドヨーロッパ語族は分離によって言語が出現したが、日本語は融合あるいは混交によって現出した言語といえる。

ここで一度まとめるとすれば、日本語の起源に関する研究において「起源」という用語は、二つの意味で使用されてきた。ひとつは、比較言語学の系統論的起源で、類縁関係にある二つの言語の一方がもう一方のもととなったという場合に用いられる語である。この系統論的起源論は、他所に祖語という形で起源を求めため、起源に関しては単一起源が基本であり、複数の起源を容易に認めない排他的な視点に立つ。もうひとつは、クレオール論的起源で、二つ以上の言語が融合することによって新たな言語が生じる場合に用いられる語である。クレオール論的起源論は、複数の言語が文法レベルで、あるいは語彙レベルで第三の言語の成立に影響を与えたとする複合起源が基本であり、さまざまな言語の影響が融合することを前提とする視点に立つ。



系統論的起源論	クレオール論的起源論
祖語	類縁語
単一起源	複合起源
排他性	融合性
分離	混交

しかし、大野晋は『日本語の源流を求めて』の中でも系統論的起源のみに目が行き、クレオール論的起源が十分意識されることはなかったように見受けられる。

とはいうものの、実は、廃版にした『日本語の起源』の旧版にすでにその萌芽を見出すことができる。

だいたいの推測をあえてするならば、縄文式時代を通じて、東部は東北シベリアと深い関係がありそうであり、西部は南方と深い関係がありそうである。

(『日本語の起源』p75)

旧版は、日本文化および日本語の東西対立について一章を割いている。西日本と東日本では、別の文化が存在し、別の言語が話されていたという推測である。これが同じ日本の中で融合していったのではないかということを示唆する内容になっている。ただし、旧版ではむしろ東西の違いに焦点が当てられ、融合するという点に言及はされていないが、日本の深層に東西の対立が存することを指摘することは、裏を返せば、その後の日本語が融合したことを示すものといえてよいであろう。

大野晋のタミル語の研究は、起源といえば本人を含め系統論的な起源観が基本であったため、起源研究という系統論的な枠組みでとらえられてしまった。しかし、当初から、無意識のうちにとってもよいと思うが、二つの言語の関係、両者が混ざり合う関係に着目していたと見ることもできる。大野の日本語の起源研究の到達点である、日本語＝クレオールタミル語は、いうなれば研究の当初からその萌芽を抱いていたわけである。

ではなぜ系統論的起源論が払拭できなかったのか。

日本語において、起源が融合である以上、祖語を仮構する必要はない。むしろ、日本語と深い関係にありそうな類縁語の影響の強度を分析する方法が有効である。

しかしながら、少なからず関係がありそうな言語であればすべて融合という認識のもとに日本語の起源になりうるわけではない。さきに『日本語の源流を求めて』のまとめの部分として紹介したなかに、日本語に影響を与えた言語として、タミル語などと並んで、朝鮮語やポルトガル語、オランダ語、さらには英仏独語などの影響も指摘されている。しかし、大野はそれらは起源とはいえないとする。なぜなら、融合論的起源に相当するには、一定の条件が必要だからである。大

野は『日本語以前』（岩波書店、1987年）のなかでその条件について述べている。

日本語と他の言語との同系説は、

- 1) 音韻法則に指示された単語の対応を組織的に示す。
- 2) 文法的形式を示す助詞・助動詞が音韻法則に指示されて対応し、用法も同様であることを組織的に示す。

この二つの条件を満足しなければならない。

(大野晋『日本語以前』p66)

これらの条件を満たせないものは、「借用語」とみなされる。英語のようにどんなにその語彙が多くても上記の文法的形式の条件を満たすことができなければ、クレオール論的起源研究の対象言語とはならない。そうすると、条件としてあげられた文法形式の類似が確認されなければならない。

文法的な類似が認められるというのは、ただ単に単語を借用してくるという関係ではなく、その言語を母語として話していることが必要である。その言語に対して言語使用者が母語話者であることが必要である。すなわち、日本語にさまざまな影響を与えたとしても、その言語を母語として話していないと、文法的なレベルでの融合はできない。

その点においてタミル語は、語彙においても文法構造においても、多くの類似点を見出すことができた。しかしその多くの類似点ゆえに、強力な影響を明らかにする過程で、系統論的な視点が復活してしまい、系統論的な起源としてタミル語をとらえてしまったのかも知れない。

4. お わ り に

『日本語の起源』になぜ旧版と新版とがあり、旧版が著者の意図によって廃版となったのかという疑問は、旧版にあった弥生時代の日本語に対する影響について大きく論が進展した結果（アルタイ語的な朝鮮南部の言語から南インドの言語へ）、変更が必要になったからであるという結論に至った。

旧版は、北方の言語と南方の言語の影響について論じ、日本の中に、その南北言語の影響を受けた東西対立が存在することなども指摘し、言語の融合を示唆した。いわばクレオール論的起源論の端緒をみることができる。

その後の新版はタミル語のみの説明に終始し、日本語の起源について、系統論的な単一起源の研究態度が色濃く感じられるものの、旧版の廃版が大野の系統論的起源論への傾斜を意味するのではなく、その両者が混在するなかで大野晋のタミル語研究は進められた。

そして、研究が進むにつれ、この二つの起源に関する考え方が次第に意識されるようになり、大野のタミル語研究の集大成となる著作は『日本語の形成』と名付けられ、クレオールタミル語説を展開している。その『日本語の形成』の「第I部 日本語の系統」の最後は、以下のように結ばれている。

タミル語と日本語との接触は、文明の接触に始まり、単語から単文へ、さらに文法全般へと関係は深化し、creoleが日本に形成されたが、それは「脱 creole」の段階までは進まず、日本語は縄文時代の音韻体系つまりCV体制のまま自己の力で表現を充実させて、原日本語を形成した。

(『日本語の形成』p701)

すなわち、ここに至って大野晋は「起源」という術語を捨て、「形成」という術語によって日本語を定義し直したのである。

参 考 文 献

1. 大野 晋『日本語の起源』岩波書店, 1957年
2. 大野 晋『日本語の起源 新版』岩波書店, 1994年
3. 大野 晋『日本語以前』岩波書店, 1987年12月
4. 大野 晋『日本語の源流を求めて』岩波書店, 2007年9月
5. 大野 晋『日本語の形成』岩波書店, 2000年5月
6. 大野 晋『弥生文明と南インド』岩波書店, 2004年11月
7. 川村二郎『孤高 国語学者 大野晋の生涯』東京書籍, 2009年9月
8. 高津春繁『比較言語学入門』岩波書店, 1992年5月
9. 吉田和彦『言葉を復元する』三省堂, 1996年3月
10. 風間喜代三『印欧語の故郷を探る』岩波書店, 1993年2月
11. R.M.W. デイクソン著, 大角翠訳『言語の興亡』岩波書店, 2001年6月

[2013. 9. 26 受理]